死刑台のエレベータ

原作者であるノエル・カレフ (本名ニシム・カレフ) は 1907 年 9 月 29 日ブルガリアで生まれた。当初、シナリオライターだったことから、「死刑台のエレベータ」でも、途中で止まったエレベータの中での心理描写において、実際に映画を見ているような印象を与えた。(植草甚一評)

また、1956 年パリ警視庁賞の最高賞に「その子を殺すな」が選ばれた際、彼の「その子を殺すな」と「死刑台のエレベータ」の二作が最後まで残った。二作の作風がまるで異なる為に、審査にあたった審査員も、最後までこの作品が同一の作者であることに気がつかなかった。この「死刑台のエレベータ」の原作は、東京創元新社刊「世界名作推理小説体系 21 巻」に収載されています。　au

「死刑台のエレベーター」オリジナルとリメイクを観て

この映画は、1957 年 (54 年前) に製作されたモノクロのフランス映画である。注目されるのは、25 歳のフランス人監督 (ルイ・マル) が、31 歳のモダンジャズミュージシャン (マイルス・デイヴィス) を起用し、29 歳の女優 (ジャンヌ・モロー) を主演にした犯罪サスペンスの金字塔とも称される作品であり、しかもサウンドトラックの録音はマイルス・デイヴィスが何の準備もなく編集済みのこの作品を観ながら、場面に応じた 10 曲を、もの哀しいトランペットで一発の即興セッションで仕上げたと言う伝説のテーマーソングである。

ジャンヌ・モローが彼を求めて雨のシャンゼリゼーを彷徨うクールな美しさ、モーリス・ロネがエレベーターから脱出しようと試みる不安と焦燥感、別の場所で起きた二つの殺人事件が絡み合う仕掛け、のシーンには心が揺るがされた。しかし、社長殺害のピストルの発射音を鉛筆削りの音で消すところや、ピストル・カメラなど重要な物を車のポケットに入れて置き、キィを付けたまま車から離れるシーンなど納得できない場面あった。全体的には、フランスのヌーヴェルヴァーグの代表作だと感動した。

日本のリメーク作品を観た。2010 年製作、監督 : 緒方明、出演者 : 吉瀬美智子、阿部寛。設定は現代の高層ビルの立ち並ぶ横浜。車も外車の最高級車、ピストルもサイレンサー着用、携帯電話もあるが連絡できない状況、サウンドトラックはトランペットに対しギターであるなど、オリジナルとは異なる設定であるが、内容的には完全なリメーク版であった。54 年前を現代の水準に合わせようと、二つの事件の関連性を表現する事に無理があったと感じられた。　S.N

死刑台のエレベーター

大実業家の息子であったルイ・マルは、16 歳でバカロレア (大学入学資格) を獲得。しかし、お決まりのエリートコースには進まず、国立の高等映画専門学校へいく。そして 21 歳で、著名な海洋探検家ジャック・イブ・クストーの海洋記録映画『沈黙の世界』の水中カメラマン兼共同監督になった。その後、ロベール・ブレッソン監督の『抵抗』で助監督を務めた後、独立プロを設立。『死刑台のエレベーター』はその第 1 回作品です。

ルイ・マルの斬新な感覚が随所に光るこの作品は、フランス映画の中で最も前衛的で芸術性の高い作品に与えられるルイ・デリュック賞 (1957) を受賞。ルイ・マル 25 歳の時でした。同時代の受賞作としては『夜の騎士道 (1955)』、『赤い風船 (1956)』、『シェルブールの雨傘 (1963)』などがあります。

この作品、ストーリー展開の面白さから登場人物の心理描写、音楽そしてカメラワークに至るまで非常に凝っていて、まるでタペストリーを織るように見事に調和されており、いっぺんに魅了されました。完全犯罪の計画が偶然のいたずらで破綻していくサスペンス、不倫の恋に身を焦がす人妻を演ずるジャンヌ・モローの存在感、都会の倦怠と孤独を奏でるマイルス・デービスのトランペット、モノクロ映像でしか現わせないだろうと思える夜のシャンゼリゼの光と影の効果など、この作品の素晴らしさは随所に見つかります。

当初、一点だけ気になったのは、元パラシュート降下部隊の英雄という設定のジュリアンの犯行にしてはあまりにあっけないミスが多すぎる点でした。ルイ・マルとその仲間の素晴らしい創作力をもってすれば、もっと緻密な犯罪計画にすることは簡単だったように思われるのに？ ということで資料類を調べた結果、この危うさが、実はルイ・マルの計算された意図であったらしいというヒントにぶち当たり、この作品の魅力が深まりました。

どうやらルイ・マルにとってこの作品は、当時の若者にとっての「かっこイイ」、「ナウい」、「大人っぽい」というあり方と、その時点での未完全さを表現しようという実験的プロジェクトの色彩も帯びていたということです。この作品の巻頭から巻末迄を彩ったマイルス・デイヴィスのモダン・ジャズ 10 曲のサウンド・トラックが、撮影直後のフィルムを見ながらのたった 4 時間のスタジオ・セッションですべて録音されたという挿話 (実話らしいです) は、このような背景の一端を物語っているようです。

監督ルイ・マル 25 歳、脚色ロジェ・ニミエ 32 歳、音楽マイルス・デイヴィス 31 歳、モーリス・ロネ 30 才、ジャンヌ・モロー 29 歳。若い彼らのコラボレーションによってこの作品が作り上げられていった熱っぽいプロセスをもっと調べてみたい気がしています。

なお、ルイ・マルが「ナウい」という表現に、随分いろんな大道具、小道具に凝っているのも可愛い感じがして興味深いです。無軌道なパリの若者カップルが逃走に使う Mercedes Benz 300 SL クーペ (当時、石原裕次郎の愛車としても有名でした)、衝撃のラストシーンを演出した西ドイツ製の超小型高性能カメラ・ミノックス A 型 (今でも熱烈なファンクラブがあります)、おしゃれなガスライター、日めくり時計、電動鉛筆削り etc.　K.M.

2011.1013
vol.14

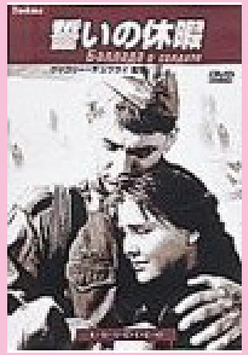
『死刑台のエレベーター』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

今後の上映案内

12 月 8 日（木）
14:00 ～ 15:30

『誓いの休暇』



監督 : グレゴーリー・チュフライ
出演 : ウラジミール・イワショフ、ジャンナ・プロホレンコ、アントニーナ・マクシモワ

戦場で思わぬ手柄をたてた兵士が、6 日間の休暇を貰った。彼はその休暇を利用して、往復だけで 4 日間もかかる、母の待つ故郷へ帰ろうとする。しかし、旅の途中、困っている人を見ると捨てておけない彼は、貴重な時間を割いて人助けをしてしまう .....。

2 月 16 日（木）
14:00 ～ 16:40

『麦の穂を揺らす風』

監督 : ケン・ローチ
出演 : キリアン・マーフィー、ポードリック・ディレーニー、リーアム・カニンガム

1920 年、英国からの独立のため、アイルランドの若者たちは義勇軍を結成する。医者を目指してロンドン行きを決意していたデミアンも冷酷な英国軍の仕打ちに怒りをつのらせ、兄とともに闘いに身を投じるが、条約を巡って兄弟は真っ向から対立してしまう .....。

『死刑台のエレベーター』フィルムデータ

原　題　：ASCENSEUR POUR L'ECHAFAUD
製作年　：1952 年
制作国　：フランス
上映時間：92 分 モノクロ

監督 : ルイ・マル　原作 : ノエル・カレフ
撮影 : アンリ・ドカエ　音楽 : マイルス・デイヴィス
脚本 : ロジェ・ニミエ、ルイ・マル
出演 : モーリス・ロネ、ジャンヌ・モロー、ジョルジュ・プージュリイ、リノ・ヴァンチュラ、ヨリ・ベルタン

りぶらサポータープロジェクト　「シネマ・ド・りぶら」

『死刑台のエレベーター』 関連図書案内 & DVD

作品・監督

N 778.2　双葉 十三郎　近代映画社
『外国映画ぼくのベストテン 50 年』

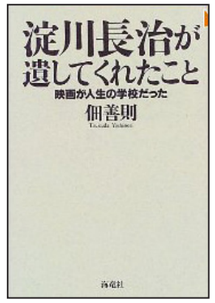
N 778.2　渡辺 祥子　近代映画社
『ファンの心をときめかせた世界の映画ベストセレクション 』

N 778.2　共同通信社
『20 世紀の映画 (Mook21)』

N 778.2　共同通信社
『20 世紀の映画監督名鑑 (Mook21)』

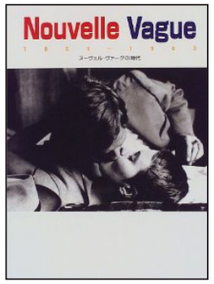
N 778.2　ネマ旬報社 キネマ旬報社
『知っておきたい映画監督 外国映画編』

N 778.0　淀川 長治　中央公論新社
『映画は語る』



289.1　佃 善則　海竜社
『淀川長治が遺してくれたこと』

N 778.0　植草 甚一　晶文社
『いい映画を見に行こう』



778.2　細川 晋　エスクァイアマガジンジャパン
『ヌーヴェル・ヴァーグの時代』

N 778.2　遠山 純生　紀伊国屋書店
『ヌーヴェル・ヴァーグの時代』

I 778.2　中条 省平　集英社
『フランス映画史の誘惑 』

N 778.2　キネマ旬報社
『オールタイム・ベスト映画遺産 映画音楽篇』

N 778.0　小沼 純一　フィルムアート社
『サウンド派映画の聴き方』

ジャンヌ・モロー

N 778.2　中丸 薫　徳間書店
『美しい人の美しい生き方』

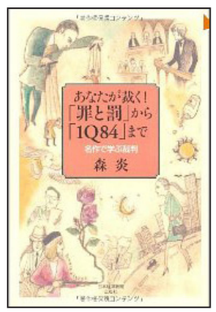
770.4　岡野 宏　幻冬舎
『一流の顔』

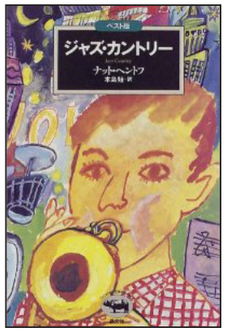
F 914.6　竹西 寛子　青土社
『虚空の妙音』

完全犯罪

930.2　植草 甚一　晶文社
『クライム・クラブへようこそ』

327.6　森 炎　日本経済新聞出版社
『あなたが裁く！「罪と罰」から「1Q84」まで』

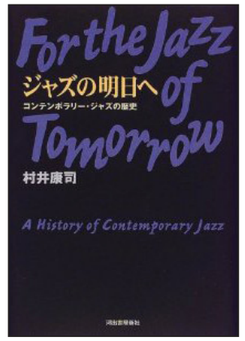




モダン・ジャズ

N 764.7　小川 隆夫　河出書房新社
『ジャズ・トーク・ジャズ
証言で綴るモダン・ジャズ』

764.7　村井 康司　河出書房新社
『ジャズの明日へ
コンテンポラリー・ジャズの歴史』



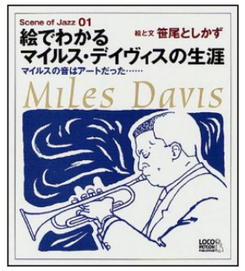
N 764.7　植草 甚一　晶文社
『コーヒー一杯のジャズ』

767　ナット・ヘントフ　白水社
『ジャズ・イズ』

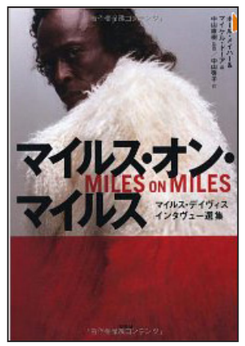
933　ナット・ヘントフ　白水社
『ジャズ・カントリー』

マイルス・デイビス

N 764.7　笹尾としかず
ロコモーションパブリッシング
『絵でわかるマイルス・デイヴィスの生涯』

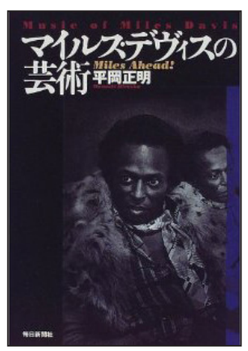


N 764.7　ジョン・スウェッド
シンコーミュージック・エンタテイメント
『マイルス・デイヴィスの生涯』



N 764.7　マイルス・デイヴィス　宝島社
『マイルス・オン・マイルス』

764.7　中山 康樹　講談社
『マイルス・デイヴィス　ジャズを超えて』

I 764.7　小川 隆夫　平凡社
『マイルス・デイヴィスとは誰か』

764.7　平岡 正明　毎日新聞社
『マイルス・デヴィスの芸術』